

令和8年度「わたしの主張岩手県大会」審査委員長講評

株式会社岩手日報社執行役員論説委員長 郷右近 勤

それでは、講評を申し上げます。

まず、今日発表された16人の皆さん、本当にお疲れ様でした。

この県大会のステージに立つまで、皆さんは相当な努力を重ねてこられたと思います。自分の考えをまとめ、それを文章に書いて練り直し、何度も練習して地区大会で選ばれ、ここに至っている。その努力に敬意を表します。とともに、皆さんも支えてくれた先生方、ご家族の方に感謝を伝えていただきたいと思います。

一方で今回、わたしの主張を県大会の場で発表したことが、将来、貴重な経験になることは間違いありません。

生きている限り、人間は様々な問題に直面します。それは、身近な家庭内であったり、学校であったり、あるいは、もっと広い地域社会であったり、さらには日本、世界が抱える問題とも向き合います。それに対して、自分の考えを持って主張するというのは、決して簡単なことではありません。

まず、自分というものに向き合わなければならない。身の回りに何か問題があったとします。それに対して、自分は何ができるか、ということをもまずは考える。

ところが、1人の力というのは限られているので、周りの人、グループ、広く言えば社会に対して、問題の解決を訴えていかなければなりません。そこに、主張というものが生まれるわけですが、人の心を動かすには、共感を得ることが必要になります。つまり優れた主張というのは、問題解決の方法を説得力を持って訴えること、と言い換えても良いと思います。

今回の県大会では、多岐にわたる主張が繰り広げられました。自らの障がい、あるいは名前のこと、取り組んでいるボランティア活動、あるいは自分が目指す職業のこと、AIや戦争のこと、国際化や世界平和を訴える方も複数おられました。

テーマは何であれ、大切なのは、問題点がどこにあるのかを自分なりに把握して、それに対する意見・提言をしっかりとすることです。その点で、皆さん地区大会代表だけあって、聞く人の心に響くものがありました。表現・態度も素晴らしいもので、審査では大きな差は付いておりません。

その中で最優秀賞に選ばれた齋藤あかりさん、岩手県が「経済的豊かさ1位」という新聞記事から説き起こし、自分の家に医療的ケア児がいること、子ども食堂のボランティア活動などから、本当の豊かさとは何かを問いかけ、知ることの大切さ、できることから始める勇気を訴え、点の取り組みを面で支える社会を目指していこう、と提言されました。構成・表現力、ともに見事で、高い評価が与られました。まさに問題点を指摘して、その解決方法は何なのかを訴えるものでした。

優秀賞の長根一華さんは、宮沢賢治の「よだかの星」から入り、心の内側にある本当のその人を見つめ、優しく包む居場所を作っていこう、と呼びかけました。

同じく優秀賞の福岡宝さんは、まさに自分のお名前「宝」をもとに、ご両親からたくさんの愛情を注いでもらったことから、次は困っている人に自分が手を差し伸べて、その人の「宝」になりたい、と訴えました。

いずれも論旨が明快で、聞く人に感銘を与えたと思います。

話は戻りますが、ミクロで言えば家庭や学校、友人関係であったり、グローバルに見れば日本や世界には様々な問題があります。例えば今、岩手県は人口が急速に減っていて、これから地域をどう持続していくか、という大きな問題を抱えています。誰かが解決策を主張して実行していかなければ、地域の課題というものは解決しません。それは、もちろん日本でも世界でも同じことで、今ほど問題が複雑に絡み合って、その解決が求められている時代はないと思います。

そして、問題というのは、毎日生じています。つまり、生きていくということは、日々問題を解決すること、と言っても良いと思います。地域や社会をより良いものにしていこう。そのためには全体のことを考えて、説得力を持って主張し、人々の共感を得る必要があります。

AIに聞けば、何らかの答えは出してくれるけれども、AIは決して人間に共感しているわけではありません。

問題解決に向けて、建設的に主張・提言できる人であってほしい。そう願って、皆さんならばそれができると確信して講評を終わらせていただきます。今日はお疲れ様でした。ありがとうございました。